

「産直市を通じた高齢者の生きがいくりと交流による地域力の再生！」

大田市久利まちづくりセンター

1 久利まちづくりセンターの概要

久利町は世界遺産石見銀山のある大森町と隣接し、市の中心部である大田町との間にある人口約1400人、世帯数約540の中山間地域である。農家のうち約8割が兼業農家、そのほとんどが農業を生業としない第2種兼業農家である。高齢化比率が30%を超え急速な高齢化の進行、担い手の大幅な減少など農業生産構造の脆弱化が顕著となっている。昭和32年、現在地に大田市立久利公民館が設置され、平成2年の改築を経て平成21年度から久利まちづくりセンターとなった。

2 事業の概要

(1) はじめに

① 実証事業名

「産直市を通じた高齢者の生きがいくりと交流による地域力の再生」

② 実証事業のテーマ

「産直市を通じた高齢者の生きがいくりと交流による地域力の再生」

③ 実証事業のねらい

過疎と小規模高齢化集落に不安のある久利町に元気を呼び戻すことを起点とし、久利町で生産される農作物を集荷、販売することで明るい町への仲間づくりのきっかけにしたい。また同時に集荷場（産直市場）で絵手紙、書、絵画など町民の文化活動発表の場、サロンのような交流拠点としての役割も果たしたいというねらいがある。

(2) 具体的な取り組み

① くりの里農援塾

町内の耕作放棄地や休耕地の解消、鳥獣害対策、野菜栽培のノウハウ取得、品質の向上、新しい担い手の掘り起こしを目的に農援塾（講習会）を行なった。

ア 休耕地、耕作放棄地対策として従来型の草刈り機ではなく、効率の良い自走式の機械を譲り受けたのを機に、実演会、講習会を開き機械の使い方、整備の仕方、注意事項などを学んだ。

イ 耕作放棄地を利用し、そば栽培のノウハウを学ぶ講習会を行い、同時に鳥獣からの被害を防ぐ対策として電柵の設置場所、方法を学びながら実際に、会員の皆さんに体験してもらった。

ウ 野菜栽培のノウハウの取得方法として、

研修会「くりの里農援塾」を開催し、端境期における野菜の栽培方法、連作障害を防ぐための対策方法など有識者を招いて講習会を行った。

エ 地域のリーダーには中山間地域研修センター、自治会連合会などの主催する研修会や視察に積極的に参加してもらい、先進地の現状やこれからの課題等を学ん



耕作放棄地の草刈講習会

でもらった。

オ 特に作物を栽培する予定の無い耕作放棄地はイノシシ等の被害を防ぐため草刈りをし、耕してコスモスを植え景観の保護に努めた。

② 生産・出荷・販売システムの充実

主な出荷者でもある高齢の女性で車の運転のできない住民が多いことから、継続的に取り組むことができるよう、生産物出荷時の負担軽減を目的とした軽トラによる集荷をはじめた。また、集荷場所の確保、共通ラベルの作成など体制づくりの確立に努めた。

ア 取り組みを始めてから会員（男性）の死去や入院にともない出荷が困難になった会員があった。また元々車を運転できない会員のため、会員のなかで交代に軽トラを出し出荷者の家を回り集荷、そして売れ残った商品を次回出荷用のコンテナと一緒に届けるという取り組みを始めた。

イ 以前は出荷者が独自のシールを使い市場出荷時に手書きで値段を書き込んでいたが、早朝の混雑時に出す側も受け取り管理する側も手間がかかり計算を間違えることも多々あった。しかしシール発行機を導入したことにより出荷時の負担が大幅に軽減し数量管理も非常に効率よくできるようになった。

ウ 島根大学の学生が県内で収穫された産物のうち出荷に余裕のある産品を関西地区の契約店舗に送り、販売するシステム作りに取り組んでいて当市場でも試験的に協力した。

③ 展示・交流・もてなしの場とするための拠点整備

ア ミニギャラリーとして町内の文化活動団体、小学生、保育園児の絵画、俳句を中心に展示し文化活動の発表の場として利用してもらった。

イ 掲示板を設置し野菜作り、有害鳥獣対策、病害虫の駆除等の情報を掲示して会員や町民に見てもらった。

ウ 6月に会員、保育園児、スポーツ少年団、老人クラブはじめ町民に声をかけ、市場付近の遊休地で芋植えを体験してもらい、10月の収穫祭では多くの町民で芋掘りをしてもらい、その場で焼き芋、スイートポテトなど加工品を振舞い、交流を楽しんでいただいた。

エ 産直市への取り組みがケーブルテレビや広報に取り上げられたことにより、保育園児の見学会や福祉施設の社会見



憩いの場としてのミニギャラリー



町民参加の代官芋収穫祭

学などで多くの方に訪れていただいた。小学校の社会科教育では地元の久屋小学校児童だけでなく、大田町からも100人単位の児童による学習会も行なわれた。また市外からも過疎の問題に取り組む自治会団体に見学してもらい、共通する課題について話し合いの場も持つことができた。



小学生見学会受入れ

3 事業の成果と課題

(1) くりの里農援塾

- ①耕作放棄地の解消策として効率の良い草刈り機を活用し会員で草刈をし、一部はカボチャを植えたり、コスモスを植えたりして景観の保護につとめたが人手不足などから、草刈のみで新たに農作物を作ることは難しかった。
- ②講習会を開催し、そばの栽培を鳥獣害対策とともに行なった。電柵の設置方法など身につけることができたが、他の方法と合わせてコストをあまり掛けずに効率を上げていく方法も今後考えていかなければならない。
- ③農援塾を開催し、端境期における野菜の栽培方法、連作障害への対策等勉強してきたが、降雨、風雪など天候や環境の理由からどうしても生産物が不足する時期があった。今後はハウスを利用したりして生産技術を高めることが課題となる。
- ④高齢化や減少する生産者に効率の良い生産方法やイノシシやサルをはじめとする有害鳥獣対策を会得してもらうためには情報の共有や講習等によるスキルアップは避けて通れない課題である
- ⑤景観、鳥獣害対策としては草刈が必要不可欠であるが、人手不足から十分にできたとは言えない。今後の課題としては絶対的な人数、後継者の発掘、育成が急がれる。
- ⑥今後は天候に左右されない生産、産直市で売れ残った野菜の処理及び活用対策、また生産物に付加価値をつける方法として加工の技術、生産拠点が必要となっている。

(2) 生産・出荷・販売システムの充実

- ①出荷時の効率を高めるため、会員の軽トラによる集荷システムを確立することができた。しかし集荷して回る会員も生産者であり、朝の混雑する出荷時に時間のロスや集計ミス無くす方法を考えていく必要がある。
- ②シール発行機を導入し出荷時のミスや時間的なロスは大幅に削減することができた。しかしレジでの業務は従来どおりの手計算であり、産直市終了後の集計も電卓でしているのが現状である。そのため計算ミスや集計と合わないといった問題も生じているので今後はレジ業務、集計業務での改善が求められる。
- ③会員同志が共同で生産することでショウガ、サツマイモなど質の高い生産物が大量にできたものもあった。しかし今後は大量にできる質の高い生産物をいかに捌いていくかという販売ルートの確立も必要となる。

(3) 展示・交流・もてなしの場とするための拠点整備

- ① 絵画、書、俳句など展示することにより買い物客、出展者ともに喜んでいただいた。今後も町内の活動団体や保育園、小学校に積極的に声をかけていきたい。

- ② 活動や行事の日程、生産技術の紹介が産直市場に来れば分るよう掲示されて生産者や買い物客には好評を得た。
- ③ 各種イベントや収穫祭、見学会など市役所、他団体と連携して行うことができた。もてなしの場ということで記念品やお土産などを渡したりしたが今後はどのようにその経費を捻出し、会員の増加、後継者対策など成果を上げていくかが課題となっている。
- ④ 産直市場を広く認知してもらうため学校、ケーブルテレビ、新聞、広報誌等に取材や訪問をしてもらい広く知ってもらうことができた。今後も広報活動は一層必要であると考えられる。

4 今後の方向性

拠点となる産直市場の開催から約1年となるが、耕作放棄地の問題、生産技術向上の問題、鳥獣害対策、後継者の育成、販売ルートの確立、加工品への取り組み等、抱える問題は山積している。草刈など毎年やっていることや皆でできることはそのまま継続し、今後は如何に効率を上げるか、天候に左右されずに生産効率を上げていくかということを中心に展開していきたい。具体的には余った野菜の処理対策、また生産物に付加価値をつける方法として加工の技術、生産拠点づくりとして、町内の空き家などを利用し加工品製造に取り組み空き家対策としても一役買いたい。生産技術も向上し、欲を出し今まで以上に無理をするのではなく高齢者の生きがいとして取り組み、結果としてやりがいのある産直市であれば地域の活性化にもつながるのではないかと考える。産直市に参加することで、社会とのつながりの実感や、多少なりとも収入を得ることによる満足感、元気、やる気が生まれ地域全体に良い波及効果が生まれ始めている。



町内で生産された野菜や果物



各地からの視察団の受入



耕作放棄地の草刈風景



くりの里農援塾での講習会